

## 平成29年度効績章表彰について

平成29年10月13日  
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）は、10月13日に、東京都立川市において、勤続年数満25年の職員に対する平成29年度効績章の表彰式を下記のとおり開催しましたので、お知らせいたします。

### 記

1. 日 時 平成29年10月13日（金） 11:00～11:45
2. 場 所 パレスホテル立川（東京都立川市）
3. 受章者 25名（表彰式出席者は24名）
4. 列席者 理事長 熊谷則道、専務理事 澤井潔、  
理事 米澤朗、理事 渡辺郁夫、理事 芦谷公稔、監事 稲見光俊、  
企画室長、コンプライアンス推進室長、総務部長、経理部長、  
情報管理部長、国際業務部長、研究開発推進部長、JR 部長、事業推進部長 他

理事長 熊谷則道が表彰式で受章者に表彰状を手渡した後、祝辞を述べ、永年勤続の労に敬意を表しました。理事長の祝辞を受け、受章者を代表して人間科学研究部長 小美濃幸司が答辞を述べました。



写真 表彰状を手渡す熊谷理事長と受け取る受章者

## 【理事長祝辞要約】

勤続 25 年を称える効績章を受章されましたこと、まことにおめでとうございます。皆さんが入社された平成 4 年は J R になって 5 回目の採用でありました。J R 会社等は民営化後に何とか経営を安定させるために様々な施策を打ち出した時期です。このような時期に新生 J R に加わり、鉄道をよくしようという気概をもって入社されたことと思います。

平成 4 年は国内ではバブル経済の終了、ヨーロッパでは東西ドイツの統一後にあつて、政治、経済等の統一を図るマーストリヒト条約、欧州連合条約が調印されました。国内鉄道では山形新幹線山形駅開業、東海道・山陽新幹線「300 系のぞみ」運行開始 (270km/h)、新千歳空港線開業等に加え、新幹線高速化試験車 STAR21、WIN350 がデビューしました。

皆さんが勤務された 25 年間は公益財団法人として設立 31 周年を迎える鉄道総研の歩みと同じ時を刻んできています。鉄道総研の活動で、特に超電導浮上式鉄道の技術開発では山梨実験線の建設、新幹線の高速化研究開発、メンテナンスの低コスト化に力を入れた時期でもあり、そのような発足時期で先輩たちの指導のもと皆さんには精力的に参画してもらいました。

御承知のように、鉄道総研は活動ビジョンを設定しています。鉄道の発展と豊かな社会の実現に貢献するというビジョンです。このために、安全性や技術の向上のためのダイナミックな研究開発、技術的良識に基づいた事故、災害の原因究明等の活動、さらに、鉄道技術で海外をリードする活動をおこなうという 3 つのミッションを設定しています。特にダイナミックな研究開発については「分野横断的に研究者が集合して発揮する総合力」、「蓄積した実験データと知見」、「独創性のある特徴的な実験設備」、「弾力的な人事運用と組織」、「変動するニーズをとらえるマーケティング」を推進し、高い品質の成果を生み出し、鉄道事業者をはじめとする社会から信頼を得ることを鉄道総研の活動の目標としました。これまでの 25 年目の年を一つの通過点とし、鉄道をさらに良くすることや鉄道の価値を高めるための活動にまい進して頂きたいと思います。

同時に今、皆さん方は若い人たちから背中を見られる立場になっています。活力ある次の世代を担う職員に、ぜひ皆さんの蓄積された知識を伝えてください。研究開発の活力は、鉄道システムへの好奇心から生まれるのだと思います。好奇心は研究の創造性を引き出します。鉄道総研の次の 30 年に向けた目標の達成のために皆さんの好奇心と力を発揮されることを大いに期待しています。

ご列席されているご家族、また今回ご列席できなかったご家族の皆さまに、永年勤続のお祝いとお礼を申しますとともに皆様のご健康を祈念いたしまして、私の祝辞とさせていただきます。



写真 祝辞を述べる熊谷理事長

## 【受章者代表答辞要約】

本日は、勤続 25 周年を迎えました私どもに効績章を賜り、誠にありがとうございました。

私どもの多くは、平成 4 年の入社であります。当時、日本社会はバブル景気崩壊という経済的に大きな転換期を迎えていました。鉄道総研は、国鉄分割・民営化を経て、財団法人として独立して歩み出した 7 年目の年で、自主・自立した活力のある研究組織づくりに役員、職員が一丸となって取り組み、それまでの技術開発の成果が花開く時期を迎えつつありました。そして、私どもが入社して 25 年が経ち、昨年 12 月には鉄道総研は創立 30 周年を迎えました。思い返してみますと、新幹線の速度向上、超電導磁気浮上式鉄道技術の確立、地震対策、脱線・衝突対策、信号システムの高度化など日本の鉄道にとって数々の重要な成果・貢献がありました。また、車両試験装置、大型振動試験装置などの各種固有の試験装置の整備や鉄道技術推進センター、鉄道国際規格センター、鉄道地震工学研究センターを設立し、研究開発成果や技術・ノウハウをもって、鉄道事業にさらに広く貢献できる体制を作ってまいりました。私どもも微力ながら、これらの業務に携わったことはこの上ない喜びであり、また誇りでもあります。

昨今の鉄道を取り巻く情勢は、国内では災害への対応、少子高齢化対策、インフラの老朽化など様々な課題に直面し、海外では近年経済成長の著しいアジアの国々が鉄道整備を計画、推進し、国際協力あるいは国際競争への取り組みが加速しています。また、産業界では、ICT に代表されるように様々な分野において急速な勢いで技術革新が進んでいます。

鉄道総研はこうした社会の変化やニーズを踏まえ、ビジョンの示す「革新的な技術を創出し、鉄道の発展と豊かな社会の実現に貢献」するという高い志のもと、現在、基本計画「RESEARCH2020」をたてて、鉄道界をはじめ社会からの負託に応えるべく、公益法人としてその取り組みを進めています。私たちも、高い品質の成果を創出し、日本の鉄道技術の先端を担い、世界の鉄道技術をリードする研究所を目指し、その一翼を担うべく、一層の努力が必要になるものと考えております。

本日の効績章を機に、初心に立ち返り、これまでの経験や実績に慢心することなく、鉄道総合技術研究所の一層の発展と社会への貢献に向けて、今後とも業務に精励することを誓い、御礼の言葉とさせていただきます。



写真 答辞を述べる 小美濃部長